

## 論文

## 英語の主語としての不定詞節の歴史的発達

松元 洋介

## 1. はじめに

(1) に例示される文主語構文とそれに対応する虚辞 *it* を用いる外置構文に関して、初期の生成文法の枠組み (Rosenbaum (1967)、Emonds (1976)) や Quirk et al. (1985) においては前者から後者が派生されると分析されていた。

- (1) a. That the world is round is obvious.  
b. It is obvious that the world is round.

ところが歴史的にはむしろ逆の発達を遂げており、古英語には外置構文や虚辞 *it* を用いない非人称構文は存在したが文主語構文は存在していなかった。(2) は古英語における外置構文と非人称構文の例である。

- (2) a. Hit byð dysig þæt man speca ær þone he þænce.  
it is foolish that one speaks before that he thanks  
'It is foolish that one speaks before he thanks it'  
(codicts, Prov\_1\_ [Cox]: 2.2.81 / Kondo (2015: 1))  
b. Eac bið swyte derigendlic þæt bisceop beo gymeleas,  
also is very harmful that bishop is careless  
'It is also very harmful that a bishop is careless'  
(coaelive, ÆLS [Pr\_Moses]: 125.2934 / Kondo (2015: 2))

(1a) に相当する文主語構文が現れるのは中英語になってからである。Kondo (2016) はこの事実に着目し文主語構文の歴史的発達に対して理論的な説明を与えた。一方で、(3) のように (1) と同様の対応関係を持つ主語としての不定詞節の歴史的発達について理論的な研究は著者の知る限りこれまでほとんど行われていない。

- (3) a. To practice regularly is important  
b. It is important to practice regularly.

文主語構文の場合と同じく、古英語には不定詞節の外置構文と非人称構文は存在したが主語としての不定詞節の例はなかった。(4) は古英語の不定詞節の外置構文と非人称構文の例である。

- (4) a. hit is god godne to herianne and yfelne to leanne  
 it is good good to praise and bad to blame  
 'It is good praise the good and blame the bad'  
 (Ælfred, Bede, Pref. (1890) 2 / Visser (1966: 959))
- b. þam cynge gelicode mid him to habbenne  
 the king pleased with him to have  
 'The king was pleased to have about him'  
 (cochronD, ChronD\_ [Classen-Harm]: 1052.2.50.2016)

(1) の定形節も (3) の不定詞節も統語構造は同じ CP であるという標準的な仮定に基づくと、古英語において主語としての不定詞節は文主語構文と同じ理由で許されなかったと予測することは妥当かもしれない (Fischer and van der Wurff (2006: 172))。しかし、英語史において to 不定詞節が主語として機能するようになる以前に原形不定詞節が主語として用いられることがあった (Visser (1966: § 898))。

- (5) Cidan on swefnum ceapes eacan getacnap  
 chide in dreams betokens increase trade  
 'To chide in dreams betokens increase of trade'  
 (Leechdoms (Cockayne) iii, 208 / Visser (1966: 949))

本論文の目標は原形不定詞も含めた英語の主語としての不定詞節の歴史的発達に対して理論的な説明を与えることである。本論文は主語としての不定詞節と文主語のどちらも TP 指定部に移動すると仮定する。両構文の話題化が否かについての議論は扱わない<sup>1</sup>。

本論文の構成は以下の通りである。2 節では文主語構文の先行研究を概観する。3 節では史的電子コーパスの調査を基に主語としての不定詞節の発達を概観し、4 節ではこれに理論的な説明を与える。5 節はまとめである。

## 2. 先行研究

この節では文主語構文の歴史的発達を扱った Kondo (2016) を概観し、その問題点を指摘する。Kondo (2016) は初期中英語において文主語構文が出現したのは that が併合される位置が変化した結果であると主張する。すなわち、(6) に示されるように古英語までは that は指示詞として CP 指定部へ併合されることがほとんどであったが、

初期中英語において全て C へ併合される補文標識へと変化した。

- (6) a. [CP [D that] [C C [TP ...]]] (OE to E2)  
 b. [CP [C that [TP ...]]] (OE to PE)  
 (cf. Kondo (2016: 24))

(6b) のように C に併合される補文標識へと変化した that であるが、指示詞としての性質は保持していることから解釈可能な素性と値未付与の格素性 (u-Case) を持つ。Kondo (2016) の主張する外置構文と文主語構文の派生は (7) の通りである。

- (7) a. [TP It<sub>i</sub> ( , u-Case) T (u—, EPP) [VP is obvious [CP t<sub>i</sub>  
 [D that ( , u-Case) + C (EPP)] [TP the world is round]]]]  
 b. [TP [CP [D That ( , u-Case)] + C (EPP)] [TP the world is  
 round]]<sub>i</sub> T (u—, EPP) [VP is obvious t<sub>i</sub>]]

(7a) に示されるように、まず虚辞 it が埋め込み節 CP の主要部 C が持つ EPP を満たすために CP 指定部に併合され、続いて主節の T の EPP を満たすために移動することで外置構文は派生される<sup>2</sup>。一方、文主語構文の場合 (7b) に示されるように、補文標識 that が埋め込み節 CP の主要部 C が持つ EPP を満たすために併合され、その CP が主節の T の EPP を満たすために文頭 (TP 指定部) へ移動する<sup>3,4</sup>。従って、(6a) のように that が CP 指定部を占める構造がほとんどであった古英語においては、主要部にと u-Case を持たない CP が主節の T の EPP を満たすことができないために文主語構文が許されていなかったが、(6b) のように that が C を占めるようになった中英語以降は主節の T の EPP を満たすことができるため文主語構文が派生できるようになった。

以上が Kondo (2016) の文主語構文の出現についての分析の概要であるが、ここで問題点を 2 つ指摘する。まず、この分析では古英語において文主語構文が可能であると間違った予測をしてしまう。(7) で見たように、外置構文と文主語構文は両者とも that が C を占めており、唯一の違いは主節の T の EPP が虚辞 it の移動により満たされるか文主語の移動により満たされるかだけである。そうすると外置構文の派生が可能な古英語においても文主語構文の例が見つかることが予測される。しかし、古英語の外置構文が 297 例見つかったのに対して (Kondo (2015))、文主語構文の例は 1 例もない (以下表 3 参照)。次に、この分析は (6) の変化と that の指示詞としての性質に依るところが多いため、(3) のような主語としての不定詞節およびそれに対応する外置構文をうまく扱うことができない。不定詞標識の to や補文標識 for が that が持つような指示性を持っているとは考えにくい。さらに次節で見るように、英語史において不定詞節のほうの主語として利用されるのが早かったという事実を考慮し、主語としての不定詞節を認可する仕組みを明らかにしていく。

### 3. 通時的観察

この節は史的電子コーパス (The York-Tronto Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose (YCOE), The Second Edition of The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, (PPCME2), The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English (PPCEME)) を用いて古英語から近代英語までの主語としての不定詞節の分布を調査する<sup>5</sup>。まず、表 1 は主語としての to 不定詞節の各時代の生起数と古英語と中英語の実例である。

表 1：英語史における主語としての to 不定詞節の生起数

EOE	LOE	EME	LME	EMod	LMod
0	1	2	18	48	80

- (8) a. To sittanne on mine switran healfe oððe on  
to sit on my right half or on  
wynstran nys me inc to syllanne  
left not-is me you-two to give  
'To sit on my right side or on my left side is not for me to grant to you'  
(cowsgosp, Mt\_[WSCp]: 20.23.1355: O3)

- b. to love God is for to love that he loveth, and hate that he hateth  
to love God is for to love that he loves and hate that he hates  
'To love God is to love what he loves and hate what he hates'  
(CMCTPARS,296.C1a.329: M3)

主語としての to 不定詞節の例が 1 例 ((8a)) 古英語に見られるが、これはラテン語の原典の模写の影響であると考えられるため、古英語には主語としての to 不定詞節は存在していないと考えるのが妥当である (山川 (1960))。これを踏まえると、表 1 の調査から、to 不定詞節は初期中英語に主語として用いられ始め後期中英語以降に一般化していったことがわかる。

次に主語としての原形不定詞節の分布とその古英語と中英語の実例をそれぞれ表 2 と (9) に挙げる。

表 2：英語史における主語としての原形不定詞節の生起数

EOE	LOE	EME	LME	EMod	LMod
1	0	11	6	0	0

- (9) a. Fulwian þonne þæt cennende wiif oðte þæt  
 baptize then that parent wife or that  
 bearn þæt þær acenned bið, ..., is bewered  
 child that there borne is is defended  
 'It is defended to baptize that parent wife and that child who is born there'  
 (cobede, Bede\_1:16.76.19.709: O2)
- b. Esteliche eten and drinken makeð þe man fair and wurliche ...  
 daintily eat and drink makes the man fair and excellent ...  
 'Eating and drinking daintily makes the man fair and excellent ...'  
 (CMTRINIT, 31.411: M1)

YCOE における主語としての原形不定詞節の生起例は (9a) の 1 例のみであるが、これはラテン語の翻訳である。また Visser (1966: § 898) はこれとは別の 7 つの古英語の例を挙げているが、そのうち 6 例はラテン語の翻訳である。さらに残りの 1 例である (10) は原形不定詞節の左方転移の例であり、原形不定詞節が主語位置を占める純粋な構文とは言い難い。

- (10) here iuel don and werse þenchen to don, þat is unriht.  
 here evil do and worse think to do that is unright  
 'To chide in dreams betokens increase of trade'  
 (O. E. Hom. (Morris) ii, 69 / Visser (1966: 949))

(10) において主語位置を占めているのは前方照応的な代名詞 *tat* (*that*) であり、これが文頭の原形不定詞節と結びついている。著者の知る限りでは古英語のオリジナルな例は 1 例もないため、主語としての原形不定詞節が古英語で許されていたという強い主張はできない。しかし、ラテン語の影響を受けていたとはいえ主語としての原形不定詞節の例は複数見つかるので、古英語にこの構文を認可する素地はできていたと考えるのは問題ないだろう。この意味において、後期古英語から原形不定詞節は主語として用いられたという Visser (1966) の観察は間違いではないだろう。実際、表 1、2 で EME において *to* 不定詞節よりも原形不定詞節のほうが生起例が多いのは、後期古英語にこの用法の確立の準備が整っていたためであろう。以上をまとめると、原形不定詞節は後期古英語に主語として用いられ始め初期中英語では一般的となるが、後期中英語以降は *to* 不定詞節に取って代わられた。

英語史における主語としての不定詞節の変化を見てきたが、これと英語史における文主語構文の変化とを組み合わせると表 3 のようになる。

表 3：英語史における主語としての不定詞節と文主語構文の生起数 (cf. Kondo (2016))

	EOE	LOE	EME	LME	EMod	LMod
to 不定詞節	0	1	2	18	48	80
原形不定詞節	1	0	11	6	0	0
文主語構文	0	0	1	3	21	45

また各構文の歴史的発達には以下のように図式化される。



図 1：英語史における主語としての不定詞節と文主語構文の出現と消失

この表から分かるように、これらの中で英語史において最初に主語として認可されたのは原形不定詞節であり、それに続いて to 不定詞節が可能になり、最後に文主語構文が可能になった。従って、英語史において文主語構文を可能にした仕組みが不定詞節にまで適用された結果として不定詞節が主語として認可されたと主張するのは妥当ではない。次節では主語としての不定詞節の出現と消失を屈折語形の衰退による不定詞節の範疇と素性の変化の観点から説明を与える。

## 4. 分析

### 4.1. 理論的枠組み

動詞句内主語仮説によると主語は  $v^*P$  指定部から TP 指定部へと移動するが、本論文では移動の仕組みについては極小主義の最新の枠組みである Chomsky (2013, 2015) に従う。この枠組みにおいては、これまで併合の誘因として仮定されていた末端素性 (Edge Feature) や EPP 素性は破棄され、外的併合 (External Merge) だけでなく内的併合 (Internal Merge) すなわち移動も自由に適用される。併合により形成された構成素にはラベル (Label) が付けられインターフェイスで解釈されるが、Chomsky (2013, 2015) はそのラベル付けの方法として概略 (11) のような提案をしている。

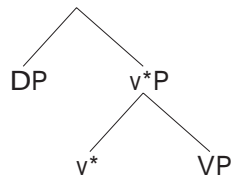
#### (11) ラベル付けアルゴリズム (Labeling Algorithm)

- 主要部 H と主要部ではない句レベルの XP が併合し形成された構成素のラベルは H となる。
- 句レベルの 2 つの構成素が併合し形成された構成素については、(i) 片方の構成素が移動し残りの構成素がラベルとなるか、あるいは (ii) 2 つの構成素

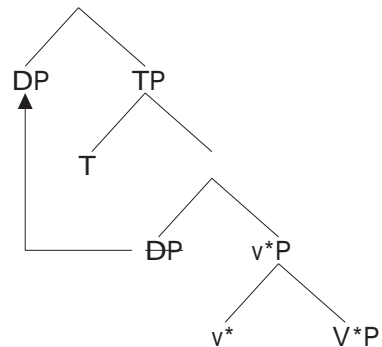
が共有する素性がラベルとなる。

(11b) の具体的な事例の一つが  $v^*P$  指定部から TP 指定部への移動である<sup>6</sup>。

(12) a.



b.



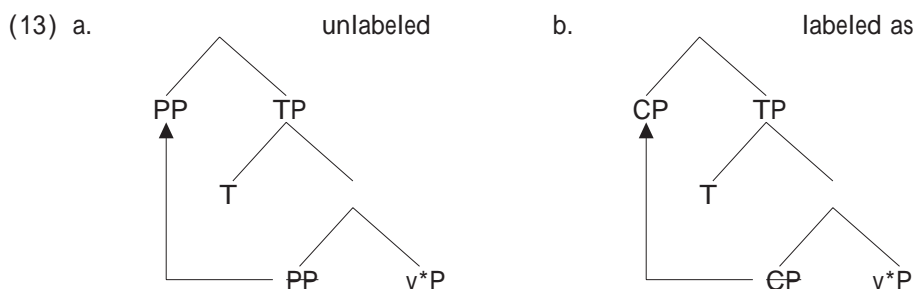
(12a) にあるように、2つの句レベル構成素である主語 DP と  $v^*P$  が併合し が形成される。(11bi) に従い、 のラベルは (12b) のように主語 DP が移動することで  $v^*$  に決定される。移動した主語 DP と TP が併合し が形成されるが、(11bii) に従い、 のラベルは両者が共通して持つ素性、すなわち 素性に決まる。

Chomsky (2013, 2015) における主語の移動の分析に従うと、TP 指定部に主語として現れる要素は必ず 素性を持たなければいけない。なぜなら 素性を持たない句と TP との併合は共通して持つ素性がないためラベルが決まらず、インターフェイスで解釈ができないためである<sup>7</sup>。

#### 4.2. 主語としての不定詞節の派生

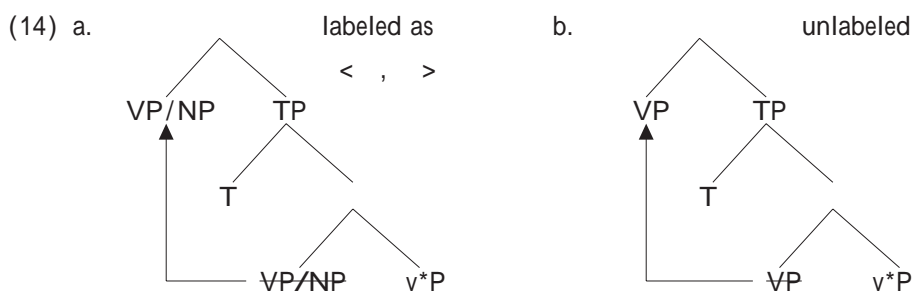
まず主語としての to 不定詞節の歴史的発達を見ていこう。よく知られているように不定詞標識 to の起源は前置詞 to である。また Tanaka (2007) によると、to 不定詞は名詞の与格語尾 -enne 持っていたことから古英語においても不定詞標識 to は前置詞であったが、中英語に入り機能範疇 T としての to が導入され、後期中英語以降は T に一本化された。これを踏まえると古英語から中英語の主語としての to 不定詞節の派生の変化は (13) の構造を用いて説明される。(13a) は to 不定詞節が前置詞句であった古英語～後期中英語の派生で、(13b) は to が T を占めるようになった後期中英語以降の派生である。





(13a) において、(12) と同じように派生は進むが、PP である to 不定詞節と TP が併合し形成された構成素 について、両者に共通する素性がないためラベルが決まらず、結果派生は破綻する。(PP のラベルは (11a) に従い、主要部である P に決定される。) Chomsky (2008) において、PRO は C から素性継承 (feature inheritance) された T との Agree により格付与される。これに従うと、(13b) に示されるように、新しい to 不定詞節の構造は (現代英語と同じ) CP となる。CP は 素性を持つ構成素であるため、(12b) と同じように主語としての不定詞節 CP と TP が併合した構成素 には共有する素性がラベル付けされる<sup>8</sup>。

次に主語としての原形不定詞節の歴史的発達を考察しよう。古英語において原形不定詞は名詞の対格語尾 -an を持ち、名詞的性質が高かった。構造格の付与は 素性の Agree を介して行われることを考慮すると、古英語の原形不定詞節は 素性を持つということになる。中英語に入ると屈折の水平化の進行とともに主語としての原形不定詞節の生起例は減少し、原形不定詞の屈折語尾が完全に衰退する後期中英語に衰退する。この変化は (14) のように表される。



便宜上原形不定詞節の範疇を VP と仮定する。原形不定詞の屈折語尾が顕在化していた古英語から後期中英語までは (14a) のように、名詞的性質を持つ原形不定詞節 VP/NP と TP が併合し、共有する 素性が構成素 のラベルとなる。後期中英語以降、屈折の水平化によって対格語尾が完全に衰退した原形不定詞は 素性を持たなくなった。従って (14b) に示されるように、VP と TP との間に共有する素性はないので、 のラベルが決定されず派生は破綻する。



ここで古英語において主語としての原形不定詞節の生起数が少ないという事実に対し説明が必要となる。本論文の分析の下では原形不定詞節が  $\langle \text{SPEC}, \text{TP} \rangle$  を持つことで TP 指定部への移動が可能となっている。中英語よりも屈折体系が豊かであった古英語なら、少なくとも中英語と同じ程度の数の例が予測されるが、3 節で見たように、実際は少数である。この問題を解決するためのヒントとなるのが Chomsky (2015: 9) における以下の記述である。

- (15) a. T is too "weak" to serve as a label. With overt subject, the SPEC-TP construction is labeled  $\langle \text{SPEC}, \text{TP} \rangle$  by the agreeing features.  
 b. In terms of labeling theory, Italian T, with rich agreement, can label TP and also  $\{ \text{SPEC}, \text{TP} \}$ ; for English, with weak agreement, it cannot, so that SPEC must be visible when LA applies.

すなわち、イタリア語のような屈折が豊かな言語において T は他の構成素と併合することなしに、それ自体でラベル付けができるのに対し、(現代) 英語の T は一致が豊かではないので T と他の構成素とが併合し共有する素性をラベルとしてつけなければならない。従って、屈折が豊かな古英語においてはラベル決定のために T は他の構成素と併合する必要はない。これが古英語において原形不定詞が少なかった理由である。

以上が主語としての不定詞節の出現と消失に対する理論的説明である。古英語において PP であった to 不定詞節は  $\langle \text{SPEC}, \text{TP} \rangle$  素性を持っていなかったため、T と素性を共有しラベル付けされることはなかった。後期中英語以降、与格語尾 *-enne* の消失により to 不定詞節が PP から  $\langle \text{SPEC}, \text{TP} \rangle$  素性を CP へと変化したことで、TP と併合した構成素へのラベル付けが可能となり、その結果 to 不定詞節の主語としての用法が生まれた。一方、対格語尾を持つ原形不定詞節は古英語から後期中英語まで  $\langle \text{SPEC}, \text{TP} \rangle$  素性を持っていたので、TP との併合の結果ラベル付けが行なわれていた。そのためこの時期に主語としての用法が認められていたが、対格語尾が消失した後期中英語以降は  $\langle \text{SPEC}, \text{TP} \rangle$  素性を持つことができなくなった。その結果、TP との併合で形成された構成素にラベルがつけられず、主語としての用いることができなくなった。

## 5. まとめ

本論文は、コーパス調査から主語としての不定詞節の出現と消失の時期を明らかにし、主語としての to 不定詞節の出現と原形不定詞節の消失に対して、最新の極小主義の枠組みに基づいた説明を与えた。これら不定詞節が主語として利用できるか否かは主節の TP との併合により形成される構成素のラベル付けができるか否かに帰せられる。そして主語としての不定詞節の出現と消失は屈折語形の消失により引き起こされる不定詞節の範疇の変化が原因であることを明らかにした。

注

- 1 文主語構文を話題化構文の一種とみなす分析については Koster (1978) や Stowell (1981) を参照されたし。
- 2 外置構文の虚辞 *it* が CP 指定部に併合され主節の TP 指定部へ移動するという分析については Stroik (1996) と Iwakura (2002) を踏襲している。
- 3 Alexiadou and Anagnostopoulou (1998) に従い、名詞的な素性を持った要素が T に併合することで T の EPP は満たされると仮定している。
- 4 説明を簡潔にするために、主節の T と主語となる虚辞 *it*・文主語との間の Agree および素性の値付けについては言及していない。
- 5 これらのコーパスの時代区分は以下の通りである。EOE (O1 (-850), O2 (850-950)), LOE (O3 (950-1050), O4 (1050-1150)), EME (M1 (1150-1250), M2 (1250-1350)), LME (M3 (1350-1420), M4 (1420-1500)), E1 (1500-1569), E2 (1570-1639), E3 (1640-1710)。
- 6 Chomsky (2013, 2015) の枠組みに厳密に従うと「指定部」という概念や TP のような範疇表記はないが、説明の便宜上これらを用いる。
- 7 (代)名詞は一見すると句レベルの要素ではないため、これらが主語として  $v^*P$  と併合した構成素のラベルは (11a) によって D または N に決定されるということが考えられる。これに対して Chomsky (2013: 46) は、(代)名詞と名詞は実際は複雑な構造を持つと主張する。また Hornstein et al. (2005: 228-229) も同様の主張をしている。従って、主語が (代)名詞であってもラベル付けは (11b) の通り行われる。
- 8 CP が 素性を持つ証拠として、人称・数の一致を示すことが挙げられる。
  - i. a. That the president will be reelected and that he will be impeached are equally likely at this point. (McClosky (1991: 564))
  - b. To say and to speak are not identical. (Collins Wordbanks Online)

参考文献

- Alexiadou, Artemis and Elena Anagnostopoulou (1998) "Parametrizing AGR: Word Order, Verb-Movement and EPP checking," *Natural Language and Linguistic Theory* 16, 491-539.
- Alrenga, Peter (2005) "A Sentential Subject Asymmetry in English and Its Implications for Complement Selection," *Syntax* 8, 175-207.
- Chomsky, Noam (2008) "On Phases," in Robert Freidin, Carlos P. Otero and Maria Luisa Zubizarreta, eds., *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, MIT Press, Cambridge, MA, 133-166.
- Chomsky, Noam (2013) "Problems of Projection," *Lingua* 130, 33-49.
- Chomsky, Noam (2015) "Problems of Projection: Extensions," in Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann and Simoan Matteini, eds., *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honor of Adriana Belletti, John Benjamins*, Amsterdam.
- Fischer, Olga and Wim van der Wurff (2006) "Syntax," in Richard Hogg and David Denison, eds., *A History of the English Language*, Cambridge University Press, Cambridge, 109-198.
- Hornstein, Norbert, Jairo Nunes, and Kleanthes K. Grohmann (2005) *Understanding Minimalism*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Iwakura, Kunihiro (2002) "A Minimalist Approach to Expletive Constructions," *English*

- Linguistics 19: 2, 186-210.
- Kondo, Ryoichi (2015) "On the Historical Change of Extraposition Constructions in English," *Studies in Modern English* 31, 1-19.
- Kondo, Ryoichi (2016) "The Historical Development of Sentential Subject Constructions in English," *Linguistics and Philology* 35, 19-31.
- Koster, Jan (1978) "Why Subject Sentences Don't Exist," in Samuel Jay Keyser, ed., *Recent Transformational Studies in European Languages*, MIT Press, Cambridge, MA, 53-64.
- Kroch, Anthony, Beatrice Santorini and Lauren Delfs (2004) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English (PPCEME)*, University of Pennsylvania, Pennsylvania.
- Kroch, Anthony and Ann Tayler (2000) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, Second edition (PPCME2)*, University of Pennsylvania, Pennsylvania.
- Los, Bettelou (2005) *The Rise of the To-infinitive*, Oxford University Press, Oxford.
- McClosky, James (1991) "There, It, and Agreement," *Linguistic Inquiry* 22, 563-567.
- Rosenbaum, Peter S. (1967) *The Grammar of English Predicate Complement Constructions*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
- Stowell, Tim (1981) *Origins of Phrase Structure*, Doctoral dissertation, MIT.
- Stroik, Thomas (1996) "Extraposition and Expletive-Movement: A Minimalist Account," *Lingua* 99, 237-251.
- Taylor, Ann, Anthony Warner, Susan Pintzuk and Frank Beths (2003) *The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose (YCOE)*, University of York, Heslington.
- Tanaka, Tomoyuki (2007) "The Rise of Lexical Subjects in English Infinitives," *Journal of Comparative Germanic Linguistics* 10, 25-67.
- Visser, Frederik Th. (1966) *An Historical Syntax of the English Language, Part II*, E. J. Brill, Leiden.
- 山川喜久男 (1960) 「英語の不定詞に見られる主格的機能の発達」『一橋大學研究年報 人文科学 自然科学研究』2 巻、87-128.